

悠久の京を訪ねて Part IV

Vol.11



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。

京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。

私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

恭仁宮の時代の直線溝

■総延長100mの直線溝

平成23年木津川市上粕北遺跡で、幅0.7m、深さ1m、総延長100m以上の直線溝が見つかりました。溝内からは恭仁宮の時期（奈良時代中頃）の土器や瓦が出土しました。この溝は、正方位で南北方向に延びており、道路や宅地内通路の側溝または区画溝と考えられます。

直線溝の西側には建物4棟、井戸1基、大きな掘り込み1基が見つかりました。この掘り込みは一辺3.5m前後、深さ1.9mで、土器とともに「讚岐国鷯足郡少領□」と墨書された木簡や米を納めたことを示す荷札木簡が出土しました。讚岐国鷯足郡は現在の香川県高松・坂出市にあたり、少領は当時の郡役所の役職名です。

この木簡の出土により、この地に役所や貴族の邸宅などの施設があった可能性が考えられます。



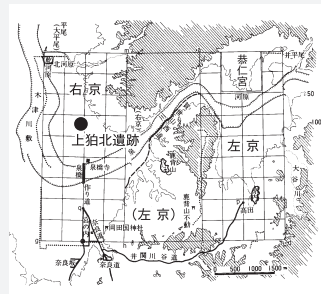
見つかった直線溝

上粕北遺跡



■上粕北遺跡と恭仁の都

恭仁宮は天平12(740)年に現在の木津川市加茂町瓶原に造営された都です。一般的に都城は、政務や儀式を行う「宮」と居住区である「京」からなっており、東半分を「左京」、西半分を「右京」といいます。上粕北遺跡は、足利健亮氏が提唱した恭仁京復元案では右京に位置します。恭仁宮跡で昭和48年度から京都府教育委員会により毎年発掘調査が実施されており、宮域は東西約560m、南北約750mの長方形であることが明らかになりました。また、近年の調査で、大極殿院、朝堂院など宮内の構造が明らかになりつつあります。京域については、『続日本紀』に「賀世山西道より以東を左京、以西を右京とする」と記載されていますが、現在まで具体的な遺構が見つかっておらず、考古学的には不明と言わざるを得ません。上粕北遺跡で見つかった直線溝や建物などは、京域を考える上で貴重な成果といえます。



恭仁京の復元案(足利健亮氏)と上粕北遺跡